

## Facebook における自己誇示の日米比較—関係流動性を用いた社会生態学的分析—

氏名 宮本 雄生

指導教諭 結城雅樹

本研究の目的は個人の能力や成功、地位などを他者に伝える自己誇示の文化差を、人々が属する社会環境の性質の違いから説明することである。オフラインにおける自己誇示の文化差に関しては、Ellis & Wittenbaum (2000) の先行研究などがある。しかし彼らはこの原因を相互独立的/相互依存的自己概念に対する個人主義、集団主義の傾向から生じると結論づけた。しかし、これらの研究は自己誇示の文化差の原因と結果が同じものを述べており、トートロジーという問題点がある。そこで本研究では、社会生態学的アプローチの観点から、自己誇示の文化差(日米差)を人々が属する社会環境の性質の違いから説明できるかどうかを検討した。本研究で注目した社会環境変数は、対人選択の自由度、つまり関係流動性である。本研究では、高関係流動性社会では資源や能力をもつ個人は他者から選択されやすいため自己誇示をより行い、一方で、低関係流動性社会では既存の対人関係から排除されてしまった場合、社会的孤立状態に陥ってしまう可能性が比較的高く、他者との葛藤を引き起こす恐れのある自己誇示を行わないだろうという仮説を立てた。この仮説を検討するために日本人 136 名、アメリカ人 144 名を対象に、関係流動性、Facebook 上における自己誇示行動、自己誇示のメリット・デメリットを尋ねた。その結果、日本人よりもアメリカ人の方が自己誇示を行い、自己誇示のメリットを強く認識していること、また一方でアメリカ人よりも日本人の方が自己誇示のデメリットを強く認識していることがわかった。そこでこの原因について様々な媒介分析によって検討したところ、全体として、関係流動性が低いほど自己誇示デメリットを強く認識し、自己誇示デメリットを強く認識するほど自己誇示を行わないことがわかった。一方、有意傾向ではあったものの、関係流動性が高いほど自己誇示メリットを強く認識し、自己誇示メリットを強く認識するほど自己誇示を行うというパターンも見られた。本研究の限界は自己誇示メリット、自己誇示行動の日米差を明確に説明する要因を見つけられなかったことである。